財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

平成19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業

モーツァルト室内管弦楽団　第122回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 122. Regulärkonzert

2009年
〈没後200年記念 ハイドン・シリーズ〉第3回

オラトリオ《四 季》

„Die Jahreszeiten / The Seasons"

2007年12月2日（日）午後2時 ■ いずみホール

Sonntag, 2. Dezember, 2007, 14:00Uhr. *Izumi Hall*, Osaka

■主催：モーツァルト室内管弦楽団

■協賛：いずみホール〔財団法人 住友生命社会福祉事業団〕

■マネジメント：大阪アーティスト協会 E-mail:artists@gol.com

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-5-25-909 Tel 06-6135-0503

Bravo! KASSU

モーツァルト室内管弦楽団

第122回定期演奏会

〈没後200年(2009年)記念 ハイドン・シリーズ〉第3回

ハイドン最後の超大作

ハイドン：オラトリオ《四季》

„ Die Jahreszeiten / The Seasons "

（日本語字幕付／制作：門　良一）

ハンネ：木村 能里子（ソプラノ）

ルーカス：西村 俊朗（テノール）

シモン：井原 秀人（バリトン）

合　唱：モーツァルト記念合唱団

合唱指揮：益子　務

管弦楽：モーツァルト室内管弦楽団

コンサートミストレス：林　泉

コンティヌオ・チェンバロ：田中 実子

指　揮：門　良一

2007年12月2日（日）午後2時■いずみホール

第1部 《春》

No. 1 序奏とレシタティーヴォ（シモン、ルーカス、ハンネ）「見よ、厳しい冬が去っていく」
No. 2 村人たちの合唱「おいで、優しい春よ」
No. 3 レシタティーヴォ（シモン）「天の牡羊座からいま明るい太陽が」
No. 4 アリア（シモン）「農夫はいまや喜び勇んで畑へ」
No. 5 レシタティーヴォ（ルーカス）「農夫はその仕事を終えた」
No. 6 三重唱と合唱「慈悲深い天よ、お恵み下さい」
No. 7 レシタティーヴォ（ハンネ）「私たちの願いは聞き届けられました」
No. 8 三重唱と合唱「おお、なんとすばらしい野原の景色でしょう！」

第2部 《夏》

No. 9 序奏とレシタティーヴォ（ルーカス、シモン）「灰色のヴェールに包まれて柔らかい朝の光が現れる」
No.10 アリアとレシタティーヴォ（シモン、ハンネ）「眠りを覚ました羊飼いは」
No.11 三重唱と合唱「昇ってくる、太陽が」
No.12 レシタティーヴォ（シモン、ルーカス）「いまやまわりのすべてのものが活動し」
No.13 カヴァティーナ（ルーカス）「自然は重圧にあえいでいる」
No.14 レシタティーヴォ（ハンネ）「さあ、暗い森にようこそ」
No.15 アリア（ハンネ）「なんという爽やかな感じでしょう」
No.16 レシタティーヴォ（シモン、ルーカス、ハンネ）「おお、見よ！蒸し暑い空気の中で」
No.17 合唱「ああ、嵐がやってきた！」
No.18 三重唱と合唱「黒い雲は遠ざかり」

*　　*　　*

第3部 《秋》

No.19 序奏とレシタティーヴォ（ハンネ、ルーカス、シモン）「はじめに春が花を咲かせて約束し」
No.20 三重唱と合唱「このように自然は勤労に報いてくれる」
No.21 レシタティーヴォ（ハンネ、シモン、ルーカス）「ごらん、あそこのハシバミの繁みの方へ」
No.22 二重唱（ルーカス、ハンネ）「町から来た美しい人よ、こちらへおいで」
No.23 レシタティーヴォ（シモン）「いまむきだしになった畑に」
No.24 アリア（シモン）「広い草原を見渡してみよ！」
No.25 レシタティーヴォ（ルーカス）「こんどは野うさぎをねぐらから」
No.26 合唱「聞け！この大きな響きを」
No.27 レシタティーヴォ（ハンネ、シモン、ルーカス）「ぶどうの木にはいま美しいぶどうの房が」
No.28 合唱「ヤッホー、ワインだ、樽はいっぱいだ」

第4部 《冬》

No.29 序奏とレシタティーヴォ（シモン、ハンネ）「いまや色あせた年は沈んでいく」
No.30 カヴァティーナ（ハンネ）「光と命は衰え」
No.31 レシタティーヴォ（ルーカス）「広い湖も凍りつき」
No.32 アリア（ルーカス）「旅人がいまここで途方にくれて迷っている」
No.33 レシタティーヴォ（ルーカス、ハンネ、シモン）「旅人が近づくやいなや耳に聞こえてきたのは」
No.34 合唱つきリート（ハンネ）「糸車よまわれ！」
No.35 レシタティーヴォ（ルーカス）「糸を紡ぎ終わって糸車ももう止まった」
No.36 合唱つきリート（ハンネ）「あるとき、名誉を重んずる娘が」
No.37 レシタティーヴォ（シモン）「乾燥した東のほうから身を切るような氷の息吹が」
No.38 アリアとレシタティーヴォ（シモン）「これを見るがよい、惑わされた人間よ」
No.39 三重唱と二重合唱「さあ、大いなる朝がやってきた」

ああ、《びっくり》したなあ、もう！

モーツァルト・イヤーの明けた今年から、モーツァルト室内管弦楽団は2009年のハイドン没後200年に向けて〈ハイドン・シリーズ〉を始めている。その理由はあらためていうまでもないのだが、単にウィーン古典派だけでなく西洋音楽史全体におけるハイドンの存在の大きさにもかかわらず、ハイドンの真の偉大さが現在認められていないと思うからである。特にモーツァルト、ベートーヴェン、前期ロマン派はハイドンを抜きにして語ることはできない。にもかかわらず、ハイドンが表舞台から遠ざかって久しいのである。「ハイドンを忘れてもらっては困ります」というキャッチフレーズのもと、われわれはハイドン復興をめざしたいと思う。

さて、〈ハイドン・シリーズ〉の第2回が第121回定期演奏会として、去る9月30日に行われた。この日のメイン・プログラムは交響曲第103番《太鼓連打》であった。ハイドンの最後から2番目の交響曲なのだが、まずめったに演奏されない。われわれの演奏は幸いにして好評を得たようで、この曲の知名度を若干上げるのに貢献しえたかと思う。

さて、この日のアンコールにはとっておきのハイドンの名曲、《びっくり交響曲》として知られる交響曲第94番の第2楽章を選んだ。《びっくり》はハイドンの交響曲の中でわれわれが最も多く取り上げてきたものであり、会心の演奏ができたと思ったものである。

この日の聴衆の中には、私が指導している大学オーケストラの団員も数名いた。終演後、楽屋にやってきた彼らはこういったのである：「先生、あの最後の曲はなんですか？」。これには腰を抜かすほどおどろいた。モーツァルトは知らずとも《アイネ・クライネ》は誰でも知っているように、ハイドンがいかに忘れられようと《びっくり》だけは誰もが知っていると思っていたのだが。そうか、ハイドンはここまでマイナーになってしまったか。学生たちには、例の「居眠りをする聴衆をびっくりさせようとしたハイドンのいたずら心」という、誰でも知っているはずのエピソードを解説するはめとなってしまった。

この「事件」で、私の〈ハイドン・シリーズ〉への決意はいっそう固められたといえる。モーツァルトと同じくハイドンも不滅なのだ。命あるかぎりモーツァルトとともにハイドンも演奏し続けよう！因みに、本日の演目《四季》には《びっくり》のメロディーが登場するのです、お楽しみに！（第1部《春》のシモンのアリア）。

王道を行くハイドン、69歳の奇蹟《四季》

ハイドンは60歳になろうというときにロンドンへの大演奏旅行を挙行する。旅行は2回にわたり、あしかけ5年に及んだ。ハイドンにとって人生で空前絶後の大旅行であった。ロンドンで自作を次々に発表、大成功を収め、ハイドンの連続演奏会はかの地の一大社会現象とまでなったのである。最初のロンドン滞在中、ハイドンにとって大変な刺激となる行事があった。それはヘンデル・フェスティバルである。ハイドンはこのとき、《メサイア》をはじめとするヘンデルの代表的オラトリオに接し、大きな感銘を受けた。大いに創作意欲を呼び起こされたハイドンは自分もあのようなオラトリオを書きたいと思い、しかるべき台本をロンドンで捜し求めた。その結果持ち帰ったのが、ミルトンの《失楽園》に基づく《天地創造》である。これをヴァン・スヴィーテン男爵がドイツ語に翻訳したものにハイドンは作曲し、1798年に完成を見た。《天地創造》は初演から大評判となり、すぐにヨーロッパ中で演奏されるようになった。ヴァン・スヴィーテン男爵はハイドンに次なるオラトリオの作曲を勧め、自ら台本を書いた。それが1801年完成の《四季》である。これは前作をしのぐ大曲であり、文字通りハイドン最後の超大作となった。

《四季》は全部で39章からなる（《天地創造》は34章）。その上1章1章が前作より長い。この曲にはハイドンのすべてがあるといって間違いない。ヘンデルのオラトリオ様式に学び、《コジ・ファン・トゥッテ》や《魔笛》などのモーツァルトの音楽から多くを吸収し、しかもなおハイドンならではの創意工夫に満ちた作品である。ハイドンはモーツァルトも完全

にはできなかったヘンデル様式の消化に成功し（モーツァルトがヘンデルを模した《ハ短調ミサ》と《レクイエム》はともに未完に終わっている）、そのモーツァルトの斬新な管弦楽法をも自己のものとして、偉大な総合芸術を生涯の最後に創り上げたのである。まさに古典派の王道を行くハイドンといえよう。

モーツァルトの最後の超大作はなにか、となると議論があろうが、私は《コジ・ファン・トゥッテ》だと思う。このオペラは、「諧謔的面白さが最高の域にまで高められて、それが突然人間の真理に迫ってくる」（永竹由幸著「オペラ名曲百科」）という、モーツァルト芸術の本質であるアンビバレンス（両面価値性）の極致と言うべき作品である。一方のハイドンの《四季》においては、勤労の称賛、男女の素朴で誠実な愛、自然への畏敬と信仰、純朴な農民の生活ぶりなど、モーツァルトとは全く逆の、大変まっとうな、人間の本来あるべき姿が描かれている。音楽の豊穣さという点で、これら両作品は甲乙つけがたいが、その内容のコントラストは際立っている。

ハイドンとモーツァルトという二大巨匠を比較する上で、私はモーツァルトの年齢を2倍に勘定すべきだと思うのである。モーツァルトは35歳と10ヶ月の生涯であったから、2倍にすると71歳となろう。ハイドンは77歳まで生きたが、最後の6年間は作曲をしていないのでこれを差し引くと71歳となる。そうしておいて主要な作品を年齢順にならべるとみごとに対応するのである。《コジ・ファン・トゥッテ》は1790年1月（モーツァルト34歳）の完成だから2倍にして68歳、《四季》は1801年（ハイドン69歳）の完成なのでほぼ一致する、というふうに。

こうしてみると、モーツァルトの早熟性と生き方のスピードには今更ながら驚かされる。だが、ハイドンが実年齢の69歳において生涯最高の超大作を書き上げたことのほうがすごいのではないだろうか。ハイドンこそは「大器晩成」の鏡というべき人であって、生涯を着実に歩み、栄光のうちに天寿を全うしたのである。

ハイドンとモーツァルトを並べてみて、最も驚くべきことは二人の完璧なまでの対照性と相補性であろう。生涯においては一方は天寿を全うし、他方は夭折する。性格は一方は常識人で、他人の面倒をよく見、規則正しい生活を送ったのに対し、他方は躁鬱症的性格で金にも女にもだらしがない破滅型であった。そして音楽においては、一方は交響曲と弦楽四重奏曲によって天下の正道を説き、他方はオペラと協奏曲においてアンビバレントな真実を表現した。

モーツァルトは弦楽四重奏曲の作曲に際し、「長くつらい労苦」（《ハイドン・セット》に付けられた献呈の辞）のもとにハイドン様式を吸収したことを隠していない。一方のハイドンはオペラ作品の提供を求められたとき、「偉大なモーツァルトの比類なき仕事」には及ぶべくもない、と断っている。同時代の最強のライバル同士が、音楽史上稀な友情と尊敬のうちにあったのは、このような二人の対照性と相補性によるものであろう。

だが音楽史の王道を歩んだのはハイドンである。モーツァルトは、思い切って言えば、音楽史の脇道に狂い咲いたあだ花にすぎない。モーツァルトは保守主義者、懐古主義者であって、後継者はいないのである。ハイドンはヘンデルやモーツァルトに学びながらも新しくて開かれた音楽を作り、ベートーヴェンをはじめロマン派の多くの作曲家が追随したのである。

第123回定期演奏会
〈懐かしのクラシック―日本の洋楽の原点を辿る〉Ⅱ
2008年1月6日（日）午後3時●いずみホール
〈浅草オペラ名曲集〉
―原語オリジナル版と当時の訳詩による浅草版との比較演奏―
《チゴイネルワイゼン》、《ウィリアム・テル序曲》、《ハンガリー狂詩曲 第2番》など、懐かしの名曲全20曲！
ナビゲーター：桂　小米朝　ヴァイオリン：鷲山かおり
ソプラノ：津山和代　テノール：清水光彦　バリトン：藤村匡人
指揮：門　良一

モーツァルト室内管弦楽団サロンコンサート
～クライネ・モーツァルト～第75回例会
2009年〈没後200年ハイドン・シリーズ〉第4回
《シュトルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）時代》
2008年3月2日（日）午後2時●ムラマツリサイタルホール新大阪
交響曲 第44番 ホ短調《哀悼》
チェロ協奏曲 第1番 ハ長調
交響曲 第45番 嬰ヘ短調《告別》
チェロ：山本 彩子　指揮とお話：門　良一

門　良一 ● 指揮　Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。フルートを曽根亮一氏に、指揮法を青山政雄氏に師事。62年京都大学理学部卒業、67年同大学院修了。70年同志とともにモーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり現在に至る。87年、モーツァルトのピアノ協奏曲全27曲、交響曲全74曲の連続演奏完結に対し、モーツァルト室内管弦楽団とともに第5回藤堂音楽賞を受賞。
現在、NHK大阪文化センター、同神戸文化センター「モーツァルトを聴く」講師。京都産業大学教授。

木村能里子 ● ハンネ, ソプラノ　Noriko Kimura, Hanne, Sopran

大阪生まれ。1981年武庫川学院女子大学音楽学部在学中ドレスデン国立歌劇場オペラスタジオのオーディションに合格し、5年契約を結ぶ。1985年ドレスデン国立歌劇場ソリストとして正団員契約を結び、ゼンパーオパー修復完成公演に出演。さらにバッハ生誕300年記念公演に出演し、その演奏は全ヨーロッパ及び日本で放送された。1986年ヴァイマール国民劇場ソリストとして正団員契約を結ぶ。一方、古楽アンサンブルのソリストとしても活躍。1989年インスブルック古楽週間における演奏はオーストリア放送協会により、また1990年レーゲンスブルク古楽週間における演奏はバイエルン放送協会によりそれぞれ放送、さらに1996年にはストラヴィンスキーならびにシュールホフのオーケストラ歌曲をCDレコーディング。オーケストラとの共演も数多くリート歌手、宗教音楽のソリストとしてもヴァイマールを拠点として活発に活動。現在ヴァイマール・リスト音大講師。益子務、リタ・シュトライヒ、ウォルター・ムーア、ノーマン・シュトラーの各氏に、またバロック唱法をルネ・ヤコブス氏に師事。
モーツァルト室内管弦楽団との縁は深く、1988年の東ドイツ演奏旅行のソリストとして現地参加。
また、1992年の《戴冠式ミサ》、1997年のシューベルト《ト長調ミサ》のソリストとして定期演奏会に出演。今回は10年ぶりの協演となる。

西垣俊朗 ● ルーカス, テノール　Toshiro Nishigaki,, Lucus, Tenor

大阪音楽大学大学院修了。在学中よりカンタータやオラトリオなどの宗教曲の演奏に欠かせない歌手として活躍。特にバッハの受難曲でのエヴァンゲリストでは高く評価されている。87年と88年にはクリストファー・ホグウッド指揮でヘンデルの「メサイア」とモーツァルトの「戴冠ミサ」を歌う。オペラでも関西二期会を代表するリリック・テノールの一人として「魔笛」、「セヴィリアの理髪師」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「愛の妙薬」等で主役を務めるほか、「第九」、「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」などのソリストとして各地で活躍している。
昭和59年度神戸市文化奨励賞受賞。平成6年度兵庫県芸術奨励賞受賞。関西二期会会員。

井原秀人 ● シモン, バリトン　Hideto Ihara, Syimon, Bariton

1999年黛敏郎：『金閣寺』での主役：溝口の好演により、2000年度 出光音楽賞受賞。『金閣寺』に引き続き、2000年ダッラピッコラ：『囚われ人』がNHKテレビにて放送され、その実力が全国的に知られるところとなる。三善晃：オペラ『支倉常長 "遠い帆"』、一柳慧：オペラ『光』やオペラ『愛の白夜』ベルク：『ヴォツェック』などでそれぞれ主役を務め、絶賛を博すなど、特に近現代オペラ作品の上演には欠かせない存在である。これまで、チョン・ミョンフン指揮=アジア・フィル、新日本フィル、東響、読響、大阪フィル、新国立劇場等の自主公演に多数登場。その活動は多肢にわたり、現在最も注目を集めている若手バリトン歌手である。これまでに出光音楽賞、村松賞大賞、ABC音楽賞・クリスタル賞、他を受賞。
現在、同志社女子大学准教授。

モーツァルト室内管弦楽団　Mozart - Kammerorchester

1970年に指揮者　門　良一によって設立され、37年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。'91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで'90年からは大阪いずみホールを本拠として定期演奏会を、また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に16回を数えている。海外では'88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス（'85、'87年）、シプリアン・カツァリス（'93、'94年）、ペーター・ダム（'83、'86、'88、'98、'00年）、ウィーンフィル木管アンサンブル（'86年）、ライナー・キュッヒル（'90年）らとの名協演はいまも語り草となっている。'91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲などで活発に協演するほか、'93年には堺シティオペラとの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。'06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。**「素晴らしい成果」**（毎日新聞）、**「この楽団は注目」**（朝日新聞）。

モーツァルト室内管弦楽団／出演メンバー

コンサートミストレス●林　泉

第1ヴァイオリン	林　泉		幣　晴代	フルート	大江浩志		佐藤明美
	青野久美子		納庄麻里子		西川一也		小椋順二
	中川衛子	ヴィオラ	道幸明美	オーボエ	戸田めぐみ	トランペット	大西由起
	谷口朋子		三吉朋子		中江暁子		森下智稔
	大西秀朋		小崎恵理子	クラリネット	高橋　博	トロンボーン	富永　玲
	村井紘子		松井紀子		門　小夜子		池田千紗
	森住憲一	チェロ	日野俊介	ファゴット	佐伯利之		今田孝一
第2ヴァイオリン	本多智子		三木恵理		西村晴美	ティンパニ	丸若安紀
	清水めぐみ		岡尾有紀	コントラファゴット	桑野春菜	トライアングル	出口智子
	川島多美子	コントラバス	三宅香織	ホルン	垣本昌芳	タンブリン	橋本浩太
	北村奈美		南出信一		垣本奈緒子	チェンバロ	田中実子
			北田由美				

モーツァルト記念合唱団（合唱指揮●益子　務）

Mozart-Choral Ensemble (Chor-Dirigent / Tsutomu Masuko)

「本番のステージで柔軟に音楽をすることのできるプロフェッショナルなコーラスがほしい」という、モーツァルト室内管弦楽団の要望を受け、特別に編成された合唱団。女声は堺シティ・オペラの選抜メンバー（若手プロ）を中心に、男声は合唱王国関西の著名合唱団の指揮者、パートリーダークラスに参加を要請、1991年7月末に発足し、益子　務氏の指揮のもとに練習を開始した。同年12月モーツァルト室内管弦楽団のモーツァルト没後200年記念第48回定期演奏会で「レクイエム」を協演、それ以後ミサ、オラトリオ、オペラなどで年2～3回協演し、なかでも92年のペルリオーズ「キリストの幼時」（関西初演、以後93、94、96年と続演）、95年のモーツァルト「ハ短調大ミサ」、99年のハイドン「天地創造」、ヘンデル「メサイア」などは特に好評を得た。93年9月には初の単独自主公演として、ジャニーヌ・ワグナー氏を客演指揮者に迎えて〈ロジェ・ワグナー・メモリアルコンサート〉を開催し、大好評を得た。98年8月にはベルギー・フランドル政府の招きにより文化交流使節としてベルギー国内で4回の演奏会を行い、大成功を収めた。創立10周年記念CD「ロッシーニ：ミサ・ソレネレ」リリース。2000年5月第2回ベルギー演奏旅行を行う。

モーツァルト記念合唱団／出演メンバー

合唱指揮●益子　務

ソプラノ	植木　奏子	大家　滋子	川森有希子	小山　恵	銭田　美幸	関　夏希	田中めぐみ
	谷本　雅美	友金　郁子	中田　佳代	平芳真寿美	御池あゆみ	森内美佳子	山本　真紀
アルト	以倉安希子	井村　園子	牛田るり子	榎田　友香	大矢喜久子	金田智津子	小島　理恵
	佐野　康子	中口真由美	中根　佳江	林　理恵			
テノール	大當　康博	岡本　弘信	河合　裕吾	桑田　明和	陶山　悟嗣	辻　幸二郎	豊田　耕平
	豊田　千之	藤本　寛志	古川　完				
バス	小畠　博	中口　悦史	野村　透	林　龍太郎	ピーター・フィンケ	福原　幸一	藤巻　恵
	米岡　実	渡邊　守					
練習ピアノ	田中　実子						
字幕オペレーター	**横家　愛恵**						

モーツァルト室内管弦楽団 後援会

事務局TEL (06) 6135-0503 / FAX (06) 6135-0504
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-5-25-909 大阪アーティスト協会内

会　長　岡本道雄（京都大学名誉教授）

理　事　大西正文（大阪ガス株式会社相談役）　谷口安平（京都大学名誉教授）
森井清二（関西電力株式会社　顧問）　吉野泰生（住友生命保険相互会社会長）
（50音順）

顧　問　齋藤房江（大阪府知事）　關　淳一（大阪市長）
伊藤郁太郎（大阪市立東洋陶磁美術館館長）　梅原　猛（国際日本文化研究センター顧問）

法人会員（50音順）

荒川化学工業	住友金属工業	日本通運京都旅行支店	三井住友カード
井上冷熱	住友精密工業	濱田プレス工藝	ワコール
大阪ガス	住友生命保険	林六	*
関西電力	住友倉庫	福山製紙	日本セルフ
クオーク	ダイキン工業	松下電器産業	
阪野商店	大同ケミカルエンジニアリング	丸紅	
サントリー	高松建設	丸山サービス	

個人会員（入会順、敬称略）

松井繁一	阿部由美子	馬場明和	三石武男	河原恭子	河渕清子
深田晴世	中川泰幸	阪野俊一	内藤壽一	平田修一	佐竹時子
河野幹雄	石上豊子	奥田慶子	小西信一郎	平田和子	千宗守
河野奈津子	村本孝夫	森明子	佐野廣子	松井とも子	荒木陽子
福岡隆子	松本幸道	宮川泰済	内田俊策	得田栄蔵	宮崎悦朗
梅原一哲	市崎英二	和田暁夫	神林恒道	南形徹	栗原順子
石本三千也	笹川忠士	桑名孝子	岡野昌樹	平山昭邦	谷口勝昭
田村眞也	緒林桂子	石光正男	岡野恵津子	村上功	完倉正信
竹村治彦	碓井昭彦	伏崎久子	杉浦和子	菱谷勝次郎	野口祐三
岸田克己	碓井みち子	松枝正明	脇田修	足立宣治	野口外志子
梅村博也	長井重龜	松枝多加子	多屋貞男	東武次郎	森本武
屋良卍佐治	桂小米朝	光成博次	野村透	竹林大	倉林正弘
國友正和	岸田多門	植田饒	佐野雅祥	田中忠人	小山浩
梅田文一	能田豊	植田史子	今井安男	中谷庄八	野原清秀
稲垣千代子	森内達治	髙杉方宏	玉手隆子	豊田紘生	大西理都子
浮田俊太郎	宮井茂治	川島弘章	鈴木宏明	奥野哲久	堀正二
荻野伊都子	祐野尚子	川島啓助	野崎志朗	平岡龍人	
桑山弘	金定秀光	坂本綽子	橋本靖昭	平岡禮子	
三谷郁子	金定嘉也子	中井武司	冠大五	大西勇	
田中喬	中條澄	中井佐和子	有賀熙雄	飛田薫	
天野康英	中嶋允子	西森文彦	佐野哲郎	桐山輝彦	
三浦信一郎	福岡昭吉	岸田孝之助	吉本正	森野多聞	
水島敬夫	山本次郎	豊田成子	小柳陽一	宮井芳子	
渡辺優子	菅正徳	切畑敦詞	服部盛隆	塩脇昭司	
平川美津子	日高穂	中東富佐子	田中四郎	塩脇祥子	
安藤邦洋	藤原啓助	金盛琢志	村西良彦	一木晃	
橋本太三雄	山本初代	四宮孝郎	島村猛	岩崎弘一	

会　費・個人会員につきましては年会費1口2万円です。
・法人会員につきましては年会費1口10万円です。
（有効期間は入会時より1年間です。随時ご入会いただけます。）

会員の特典・年間6回の自主公演にご招待致します。（1口に付き個人各1枚、法人各5枚）
・ご同伴者は10％割引となります。
・関連演奏会のご案内又はご優待を致します。
・定期演奏会プログラムにご芳名を記載させていただきます。
・会報「ディヴェルティメント」をお送り致します。